

教員活動状況報告書

提出日：令和 5 年 3 月 3 日

所 属：生命環境科学部 臨床検査技術学科

氏 名： 宮武昌一郎 職位：教授

役 職：

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

（教育活動について何をやっているのか：役職担当・主要担当科目リスト（必修，選択）（受講者数）（学部向け，大学院向け）（學理データ活用）

教師として何に責任を負っているかを明確にし，自分が担当している授業科目に関して数行で説明する。（分量の目安：2～5 行（80 字～200 字）（科目表以外））

※分量（字数）はあくまで目安ですので，超えても構いません。内容を優先して下さい。（以下同じ）

（教育活動について何をやっているのか：役職担当・主要担当科目リスト（必修，選択）（受講者数）（学部向け，大学院向け）（學理データ活用）

教師として何に責任を負っているかを明確にし，自分が担当している授業科目に関して数行で説明する。

免疫学 I；生体防御機構の現時点で解明されている全体像を理解することを目指す。生体防御機構の解明は生物学を牽引している分野の 1 つであり、細胞生物学の基礎も合わせて説明する。国家試験の準備にもなるように配慮する。

免疫学 II；免疫学的検査の原理を理解し、実際にどのような検査があるのか、それがどのように活用されているのか、さらに免疫システムの関与する疾患についても学習する。検査技術は日進月歩であり、なるべく最新の情報を提供するようにしている。国家試験は、ほとんど使われなくなっている検査法などが出題されることもあれば、比較的新しい検査法が出題されることもあり、このような点を配慮する。

臨床血液学 I；止血機構を中心に、その分子機序、止血機構に関する検査の原理、止血機構の関与する疾患について学習する。国家試験の準備にもなるようにする。

臨床血液学 II；白血病を中心とした白血球の関与する疾患について学習する。国家試験の内容の変化に則して、血液腫瘍の WHO 分類についても解説する。

免疫学実習；免疫学 II で学習した様々な免疫学的検査を実際に行い、体験を通して理解することで、検査を自分で行えるようにする。

臨床血液学実習；臨床血液学 I および II で学習した様々な血液疾患を診断するために必要な血液学的検査を実際に行い、体験を通して理解することで、検査を自分で行えるようにする。

臨床検査総論実習；臨床検査技師の重要な業務である採血を体験し、繰り返すことで、臨床実習など臨床の現場にできる限りスムーズに入れる様にトレーニングする。また新型コロナウイルスの PCR 検査の検体としても重要な咽頭ぬぐい液の採取も練習する。

総合臨床検査学演習；国家試験の中で臨床医学総論の部分について、最近の国家試験の傾向を分析し、それに基づいた学習を行う。また重要問題の背景となる基礎知識の理解が必要であることから、それをできるだけわかりやすく説明することに努める。

生体防御学特論；大学院前期課程の講義であるが、免疫学の講義を受けてこなかった学生に免疫学の基礎知識を講義するとともに、新型コロナウイルスに関する論文の紹介、免疫チェックポイント機構についての解説など、最新の免疫学が大きく貢献している分野の説明も行う。

科目名	学科・専攻	必，選， 自	配当年次	受講者数
免疫学Ⅰ	臨床検査技術学科	必	2	98
免疫学Ⅱ	臨床検査技術学科	必	3	87
臨床血液学Ⅰ	臨床検査技術学科	必	2	103
臨床血液学Ⅱ	臨床検査技術学科	必	3	87
免疫学実習	臨床検査技術学科	必	3	83
臨床血液学実習	臨床検査技術学科	必	3	81
臨床検査総論実習	臨床検査技術学科	必	3	78
総合臨床検査学演習	臨床検査技術学科	必	4	78
生体防御学特論	環境保健科学	選	1	3

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

1. で説明した教育面での責任を基にしながら自分の教育理念に基づいて自分の教育アプローチについてまとめる。（自分の教育アプローチの説明：なぜやっているのか，自らの信念，価値，目指すもの）（分量の目安：8～12 行（320 字～480 字））

生命を分子レベルで理解するということを基準に講義を行なっている。これはどの科目でも共通である。医学、生物学は、暗記をする科目であると認識している学生や、基礎知識（例えば pH がどのような指標なのか）が非常に不足している学生が見受けられるが、分子生物学による生命の理解は、分子メカニズムの理解が必須であり、このような学生は学習に苦勞する。また臨床検査技師は、検査技術に精通しているだけでは不十分であり、医師の片腕となって働くためには、疾患についても深い知識を持つことが重要である。したがって疾患についての理解を深めることを重視している。医学の進歩は非常に速く、新しい疾患の理解に基づいた、新しい検査法も次々と認可、導入されている。できるだけ新しい疾患概念や検査法について説明するようにしている。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

教育の目的と目標（これまでの教育経験においていつも行っていること。重要視していること。自分の教育を特徴づける方法）（分量の目安：15～24 行（600 字～960 字））

生物学や医学は日進月歩であり、講義内容は、最新の知識をできるだけ盛り込んでいる。

講義中も講義以外の時間も、常に質問を受けつけ、丁寧にかつなるべく早く説明する様にしている。講義中は、なかなか自主的に質問してくれないので、こちらから質問し、学生が自分で考えることを促している。講義で使用する資料は、ダウンロードできる様にし、また講義は録画し、オンデマンドで常に復習できるようにしている。過去の国家試験の問題の解説や、科目に関連した国試の問題を集めた資料の配布も行なっている。国家試験で出題される重要テーマは、常に指摘しながら講義を行なっている。

アクティブラーニングについての取組

講義中だけでなく、常時、対面やメールで質問を受け付けている。講義中は、なかなか質問が出てこないことが多いので、こちらから質問をしている。質問に対しては、できる限り速やかに説明し、その内容は學理にアップロードすることで、他の学生も学習できるようにしている。試験以外に課題のレポート提出を行なっている。レポートに対しては、詳しく説明を付したレポート例を學理にアップし、常時、質問を受け付けている。

ICT の教育への活用

Online でオンデマンドの講義を視聴できる様になったことは、非常にメリットが大きいと考えている。講義で使用する発表資料は全てダウンロードできる様にしており、通し番号のページをつけてあり、資料のページ順に講義を行い、どのページを説明しているのか頻繁に指摘している。各講義の動画が、資料のどの部分についてか、ページからすぐにわかるようにしており、聞きたい部分の頭出しをすぐに行える様になっている。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）（分量の目安：15～24行（600字～960字））

現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

（①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください）

①教育（授業，実習）の創意工夫（A～C） B

②学生の理解度の把握（A～C） B

③学生の自学自習を促すための工夫（A～C） A

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C） B

⑤双方向授業への工夫（A～C） B

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V 学科，M 学科の教員の方のみ記

載してください。)

学生に積極的に質問するように促しており、それでもなかなか質問してくれないため、こちらから質問している。質問は対面でもメールでも常時、受け付けている。リクエストがあれば、2-3時間のミニ講義も行っている。

理解度は、学生からの質問などで把握している。

レポートの提出はないが、課題を多数、提供し、その説明を學理にアップしている。

気楽に質問できる環境を作ることが重要と考えている。

国家試験だけでなく模擬試験もできるだけ収集し、最近の傾向を分析し、講義に取り入れている。暗記することに注力する学生がある程度いるが、過去問などを記憶するだけでは合格することは難しい。どのように勉強するか、勉強の仕方の問題である。勉強方法が不適切な学生を見つけ出し、関連するテーマについての知識を体系的に習得するようアドバイスし、それにより成績がよくなっていくことを実感できるように努力している。他の要素も含め、国試対策をどの様に行うか、アドバイスすることを心がけている。

5. 学生授業評価 (分量の目安: 4~7行 (160字~280字))

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

一定レベル以上の学生には、高評価であったと思う。それ以下の学生には、膨大な資料に面食らい、講義にもついていけなかった様である。わからないことはなんでも質問する様に、常時伝えている。質問に対しては、メールでも対面でもなるべく早く、丁寧に説明する様にしており、それも高評価であった。講義がよくわからない学生には、最初にわからなくなったところから質問する様に話している。質問するというのは学習することに対する積極性の現れであるから、質問しない学生には積極性が欠けている。大学での学習は積極的に行うことが前提である。このことを理解できない学生に、どの様にそのことを理解してもらうかは難しい問題かもしれない。

② ①の結果はどうでしたか。

試験と課題のレポートを組み合わせることで、勉強に対する取り組み方に関する各自の情報を得ている。勉強方法に問題があると感じる学生に対しては対面、メールなどでアドバイスをを行っている。毎年、こちらの思いが伝わらない学生は一定程度存在する。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。

国試の準備は、他の学習と異なることはない。専門科目を十分学習することが、国試の準備になることを頻繁に説明し、国試の準備を早期から (具体的には3年生の初めから) 行えるように、勉強の方法や参考書などについて具体的にサポートする。昨年の卒業生に行われたアンケート結果は非常に有用と考えており、その内容も紹介している。

6. 学生の学修成果 (分量の目安: 4~7行 (160字~280字))

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

(参考となる取組については、学内で共有させていただく予定です。)

4年生のクラス担任になったことで、国試の準備について、より考察するようになった。国試の準備に対する取り組み姿勢に問題がある学生に対しては、問題点を明確に指摘して、改善を促している。学生の方から相談に来てくれると、アドバイスできるが、相談に来ない学生に対して、問題がある学生を早い時期にどのように見つけ出すか、複数科目で不合

格な者、合格はしているが、複数科目の成績が悪いもの、あるいは GP が悪い者は候補者と考え、積極的に介入することは考えられる。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価
アドバイスした学生が、国試に合格したことは成果と受け止めている。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）（分量の目安：1～2 行（40 字～80 字））

必要と思える研究会には参加した。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。（分量の目安：3～6 行（120 字～240 字））

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。

一生懸命勉強しているが、成績が思った様に伸びない学生が一定程度おり、国試の準備に非常に苦労し、多くは国試が受験できないか、不合格となる。勉強方法に問題がある場合が多いと考えられるが、本人はなかなかそれに気がつかない。このような学生を3年生くらいには見つけ出し、勉強方法を改善する様にアドバイスしたいと考えている。4年生の総合臨床検査学の試験で、なかなか成績が上昇しない学生として見つけることができるが、それでは発見が遅すぎる。専門科目の成績が悪い学生には、自分の勉強方法が正しいか、よく考えるように話している。学生からの相談や質問は、常時、受付ており、素早く対応している。学生の方から気楽に相談や質問に来てくれるように促している。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

※資料については非公開扱いのものもありますので、資料名のみを記載してください。

参考

※ ティーaching・ポートフォリオにおける自己記述を裏付けるエビデンス例

（「実践ティーaching・ポートフォリオ スタータブック」（大阪府立大学高専ティーaching・ポートフォリオ研究会 編）から引用）

（自ら作成するもの）

1. 授業に関するもの

シラバス、小テスト、宿題、レポート課題、試験問題、教材（配布資料、パワーポイント資料など）

2. 教育改善に関するもの

（教育に直接貢献する研究、FD プログラムなどへの参加記録、教育の工夫を示すもの（複数年のシラバス等）、教育活動関連の補助金の獲得

（他者から提供されるもの）

1. 学生から

授業評価データ、授業に関するコメント（授業評価の自由記述やメールのやりとり等）、卒業生から授業や教育についてのコメント

2. 同僚から

授業参観の講評、作成教材についての意見、同僚のサポート実績

3. 大学／学会等から

教育に関する表彰、教育手法等に関する講演の記録及び招聘の要請書類、カリキュラムやコースの設計などについての評価

（教育/学習の成果）

授業科目受講前と受講後の試験成績の変化、学生の小論文・報告書、学生のレポートの「優秀」「平均的」「平均以下」の例、特に優秀な学生についての記録、指導学生の学会発表などの成果、学生の進路選択への影響についての事実、学生のレポートの改善の軌跡